立川教会主催 第15回「青年の夕べ」

■日　時：2021年12月12日（日）
■感　話：「傷、癒し、赦しについて」小林詩音(私立中高英語科教員)
■聖　書：イザヤ書53章1節～5節
■讃美歌：1－96「エッサイの根より」・1－121「まぶねの中に」

自己と向き合う中で、また他者と関わる中で、「傷」「癒し」そして「赦し」の３つのテーマが、自分の心の中に浮かんでは消え、浮かんでは消え、なんだかんだ心の片隅にひっそり座り込み続けています。今回は、３つに焦点を当ててみたいと思います。

まず、傷について。自分らしさを形成する要素の中で、心にある「傷」というものは、良くも悪くも大きな影響を持つと考えるようになりました。自分の傷が痛むが故に、他者に対して攻撃的な行動を取ったり、自分の傷に蓋をして無感覚になっているが故に、他者の苦しみに共感できなくなってしまうことがあります。また逆に、自分の傷の痛みを覚えているが故に、他者に優しくできたり、自分の傷を思い出せるが故に、他者に共感できたりもします。傷が激しく疼いている間はまだ、他者の似た苦しみに寄り添うことは困難で、むしろそれを否定したくなることもあります。けれども、苦しみを克服できた時には、他者の傷に寄り添うことができるようになると思うのです。

私には、他者との関わりの中で受けた深い傷が、長期間疼いていたことがあります。今でも時々ふとしたきっかけがあると、当時の、深い闇に落ちて行くような感覚に引き戻されそうになる傷もあります。そんな傷の一つは、とある教育現場で長い時間かかってついた傷です。今では当時自分が通った軌跡を、多少言語化できるようになりました。心が傷ついていく最中は、傷から頑張って目をそらすので、案外なんとかやっていけたりします。自分は大丈夫、他の人も耐え抜いた訳から、自分だって耐えられるはず。頑張って環境に適応すべきだ。なんとか他のもので気を紛らわし、実際ある程度は耐え抜けてしまいます。けれどもそうしていると、自分の体と心が切り離され、徐々に乖離して行くような感覚に陥ります。心の中にまるでパンドラの箱があるかのように、自分のパフォーマンスに都合の悪い感情や思いはすべて心の隅にしまい込み、厳重に蓋をし、現場ではあたかも問題などないかのように振る舞おうとしていました。実際はなんだかんだ、時々押さえつけきれずにパンドラの箱の蓋がパカッと空いてしまうので、現場を離れた時にどっと負の感情が出てきてしまったりと、すべて隠すことなどできなかったのが現状です。

ある時、もう無理だからこの場を離れよう、と思えるようになった転機があり、神にも「もういいよ」と言われたような気がして、その場を去りました。しかし、別の教育現場で仕事をしていても、強い焦燥感、不安感、そして恐怖心が拭えませんでした。自分に思っていた以上の深い傷が残っていること、そのせいで、違う場所にいても、教育現場であるというだけで、同じ反応が出てしまうことに気づきました。そのままではストレスレベルがあまりにも高く、フルタイムで働く際にも困難が生じそうでした。教育現場に残るためには、一度心の隅のパンドラの箱を開け、分離した自分を再統合しなければなりません。けれども、箱を覗き込むたびに、その中から出てくる負の感情があまりにも強く、自分はもう教育現場は無理なのではないかと思いました。他の仕事に切り替えることも考えましたが、残念ながら、教師以外に魅力を感じられる仕事が一つも見つかりません。それだけでなく、心のどこかで、神から教師になるよう呼ばれていると思うことが度々ありました。

私の進むべき道が教師の道なのであれば、神はこの傷をきっと癒してくださるだろう。そう思い、もう一度だけ頑張ってみようと門を叩いたところ、私を受け入れてくれたのが今の職場です。ここで私は、対等な立場にある教師として私を尊重し、かつ助けを求めればすっと助けてくださる、多くの同僚に出会いました。また、私を一人の教師として真摯に受け止めてくれる、多くの生徒たちにも出会いました。私は教育現場で、安心して働く、という感覚を初めてしっかりと味わいました。周りの人たちの温かさに助けられて日々を過ごしているうちに、気がつくと、ついこの前まで付きまとっていた極度の焦燥感、不安感、そして恐怖心は消えていました。（※時を経て自分も成長した結果、今のコミュニティーでやっと安心して、周りの温かさをフルに感じられるようになった、ということです。以前の環境でそのような同僚がいなかった訳ではありません。その人なりの尊重の仕方があったけれどそれが私とは合わなかった、というケースもありますし、当時の私に周りの気持ちを受け止める余裕がなかった、というケースもあります。また、生徒に関しては、以前の環境でも生徒に救われるという経験が度々ありました。苦しい時に救ってくれたのは、いつも生徒でした。）

神の癒しの手は、周りの人々を通して大きなスケールで動き、私に向かって差し伸べられていました。ある文脈において受けた傷は、似た文脈で真逆の関係性が築かれたときに、もっとも早く癒されていくのだと、私は知りました。

さて、「傷」について私の経験をお話ししましたが、「癒し」についても考えていることがあります。「傷」を受けると「癒し」を求めたくなるのですが、私は、完全に癒されない方がいいとも思うのです。傷ひとつない状態に戻るのではなく、傷跡くらいは残っていて欲しいのです。完全に癒えてしまったら、それは忘却にもなります。けれども、苦しんだ経験は、他者の苦しみを理解するための手段となります。他者に近づくために、相手を少しでも理解できるようになるために、自分の傷跡は残しておきたいし、苦しみの記憶を忘れないようにしたいのです。

聖書を見ると、癒しは必ずしも求められてはいないのではないか、と思うことがあります。むしろ、傷を負うことがイエス・キリストにも、また預言者にも求められているように思えます。イエスほど傷を多く負った人は、聖書で他に見当たりません。最後まで苦しんで、イエスは十字架の上で死なれました。また預言者たちも、同胞から迫害され、家族にも見捨てられ、孤独になり、神への祈りも報われず、同胞が腐敗していくのを目の当たりにしながらそれを完全に止めることはできない、という中を通っています。その結果預言者たちは、時に愛しているはずの同胞を呪い、従ってきた神に怒りの言葉を投げつけ、中には死を願う人もいました。過酷な道を通る中で、彼らも傷つき、苦しまねばなりませんでした。イエスも、預言者たちも、人々に寄り添うためには、そこまで傷つかなければならなかった。それこそまさに、神が彼らに求めていたことなのではないでしょうか。

そして、イエスを見ると、彼は周りの人々を癒す存在だったことが聖書に記されています。あそこまで傷つけられた方が、十字架にかかる前も、そして十字架ののち今に至るまで、実に多くの人々を癒しているのです。福音書を読む時に、イエスと自分は違いますが、それでも、自分の傷は、他者に寄り添うための大切なツールになるのではないかと思うのです。傷によって他者に牙を剥くのではなく、傷によって他者を受け止められるようになりたいと思うのです。そのためには傷がある程度癒えていることも必要ですが、完治している必要もないと思うのです。

色々とお話ししましたが、ここまでをまとめると、以下２点が私の言いたかったことになります。一つ目は、心の傷は、その傷を受けた環境と似た環境で、異なる関係性を築いたときに癒えていくということ。二つ目は、癒しも大事だけれども、他者と向き合っていく上で傷は大切なものであるということ、です。

さて、「傷」と「癒し」について考える上で、私の中でどうしてもネックになるものがあります。それが３つ目の「赦し」です。他者から傷つけられた時、他者を「赦す」とい

う道があります。ですが、この「赦し」とは何なのでしょうか。この問いがずっと心の中に残っています。

赦しは相手への負の感情を乗り越える力があるように思います。ですので、赦したつもりなのに傷がしっかり残っていて、思い出すたびに相手への負の感情が出てきてしまうとしたら、それは赦しではない気がします。けれども、逆に傷が治ったら自動的に赦したことになるかというと、そういう訳でもない気がします。傷跡ひとつなく癒えた状態は、赦しというより忘却に近いと思います。赦しを経て忘却に至る場合もあれば、赦しがなく忘却に至ることもあるのではないでしょうか。

そんなとりとめのないことを考えますが、私はどうも、誰かを「赦した」という記憶があまりありません。「あれは最終的には赦したんだろうな」と思うことはあるのですが、赦すことができたものは心のしこりとして残っていないので、当時どんな感覚だったか、記憶が残っていないようです。やはり赦しというのは記憶に残らないのかも知れません。逆に「赦そうとしたけど失敗して残っているしこり」や「全然赦せていないしこり」もあります。そんなしこりたちは、今後、私の忘却の中に埋もれていくのだろうと思います。

反対に「赦された」ということが衝撃として迫ってくるような記憶も、残念ながらあまりありません。相手の手を踏んでしまったとか、傷つくようなことを言ってしまったとか、うっかり物を壊してしまったとか、そういうことで赦してもらったことはあります。しかし、非常に深刻なことは、そもそも気づけていなかったり、気づいていたとしても、心の底から謝罪するよりも、相手の忘却に賭けてきてしまったのかも知れません。こんな感じで、赦しと忘却の境目を最近考えています。

赦しについて、もう一つ疑問に思っていることは、赦しが自分の心の中で完結するものなのか、それとも、自分と相手の間においてのみ成り立つものなのか、という点です。相手が全く変わらなくとも、私が一人で勝手に相手を赦すというのは、可能なのだろうか。それとも、相手の謝罪や態度の変化があったときに初めて、私は相手を赦せるようになるのだろうか。そんなことも考えます。私が、赦そうとしたけれど赦せなかった記憶として残っているものはすべて、相手からの真摯な謝罪はなく、相手は特に変わってもいなかった、という共通点があります。逆に、気づいたら赦していた、しこりがなくなっていたものは、相手が謝罪してくれたり、相手が成長して私を傷つけたときとはもう違うと分かった、といったことが起こっていました。

以上、赦しについては、赦しと忘却について、また赦しが自己完結するのか、それとも相手との間に必ず成り立つものなのかについて、自分の中で問いが残っています。そんなこんなで、私にはまだ「赦し」という言葉はピンときません。「神からの赦し」という言葉も、実はあまりピンときておらず、「神からの受容」という表現の方がしっくり来ると感じています。醜さも弱さも持っているありのままの私を、神は受け止めて下さっている。肯定している訳ではないけれど、一度受容してくださっている。今の私はそう捉えています。もしかしたら「神からの赦し」がピンとこないのは、私がまだ真摯に謝罪をしていないからかも知れません。

赦しについては、問いばかりで、まだ結論は何も出ていません。今後も他者との間の赦し、また神からの赦しについて、考え続けていきたいと思っています。今日は、皆さんにとっての赦しとは何なのか、という点も、ぜひ聞かせていただきたいと思っています。